

# 研究発表要旨

## 南九州の神楽の芸態

### —男の神楽と女の神まつり—

吉川 周平

南九州と言われる宮崎・鹿児島両県において、神楽は注目すべき様相を示している。

その第一は、分布の著しい相違で、九州本土には男性だけで演じる大規模な曲目編成の神楽（鹿児島県では神舞と言う）しかなく、離島には女性がまう小規模な神楽しかない。

本土の男性の神楽は、笛・太鼓・銅鉦子等の囃子でまうが、舞踊としては次の四種に大別できる。

①複数の素面の舞手による舞……リズムにのった跳躍性にとむステップで、舞所を大きく使い、あざやかに陣型を変えつまつ。

②単数の素面の舞手による舞……跳躍性はほとんど見られず、舞所の真中に出て、その場で所作をするもので、ロコモーション性に乏しい。

③仮面をつけた単数の舞手による舞……舞踊としては、①と同様のもの。神をあらわす仮面の場合には、能の段ごとに採物を持ちかえてまう舞のように、採物を持ちかえてまう。

④仮面をつけた複数の舞手による舞……①とは異なり、演劇的な物真似の要素が見られる。

一方、離島の女性がまう神楽は、鹿児島県下のトカラ列島の悪石島や口之島などわずかな島にしかない。これは、素面の一人の女性が鈴や幣を持ってまうもので、本土の男性の神楽の舞とは異なる。

本土の男性の神楽が、共同体の最大最重要のまつりとして、夜を徹する長さでおこなわれるのに対し、離島の女性の神楽は、一曲しかなく、比較的短時間でおこなわれる。この神楽をまう女性はネーシ（内侍）と言われ、多くのまつりにおいては神楽をあげずに、数珠などを用いるだけで神懸って託宣をしたり、病気の祈祷をしたりして、その島の神まつりをつかさどっている。すなわち、離島では神楽はそれほど重要な地位を占めていないわけである。

南九州の神楽の第二の注目すべき様相は、男性の神楽が宮崎県下において、山間部を南から北上するにしたがって、次のような顕著な傾向をもって変容していることである。

すなわち、⑦舞台は南部の屋外の三間四方から、北部へ行くくと屋内の二間四方へと縮小し、①動作も最南の霧島山麓の祓川の神楽は、スキップしながら左まわりに大きくめぐるなど、きわめて跳躍性とロコモーション性にとむのに対し、北部では跳躍性やロコモーション性がうすれ、②屋外舞台

の南部では、問答をする以外はあまり座したりしないのに、北部では座したり膝をついたりする振りが多くなり、椎葉村の向山日当の神楽はほとんどの曲が、座してうつぶした状態で始まり、同様にして終るといった有様で、④北上するほど、舞踊性よりも演劇性や物真似の要素が強まるというような傾向がある。

南九州の神楽を特色づけているのは、①に属す仮面を付けない複数の舞手がリズムカルにとびはねて陣型をかえつまつ曲であるが、その中でもカンス（シ）イと称す曲は、広く分布し、日当では目覚まし神楽と言うくらい、見物の睡気を醒ますような振付のあざやかさがある代表的な曲目である。

このカンシイは、日当の間半間口のきわめて狭い舞台においても、抜身を持った四人がくっつきそうになりながら走りまわって、やっこのことで陣型を変えている。この舞は、二間四方の舞台の高千穂の神楽においても、窮屈さは変わらない。

これに対して、屋外の三間四方の舞台を有す祓川においては、十二人剣という十二人が抜身を持って舞うものまで見られるが、カンスイのような曲は、もともと広い舞台でこそ発達した振付であって、狭い舞台に移入されてもなお走りまわらなければならぬと受取られているわけである。したがって、少なくとも①に属す曲は、宮崎県では南部に中心があったと考えるべきであろう。

また、神楽の太鼓の横に置いて打つという形式は、韓国の鄭炳浩中央大学校教授によれば、百済系の全羅南道のやり方であり、朝鮮を源流とする太鼓と考えられるものである。

そこで、①のような祓川神楽の舞の特徴も、朝鮮に源流があると考えざるをえないものであることから、私は、霧島山麓に男性によるきわめて朝鮮的な神楽が成立し、それが北へ拡散する過程で、⑦①②③④といった日本化とも言えるような変容をとげてきたのではないかと考えるわけである。

そして、南九州の離島から沖縄地方まで、男性による神楽が全く見られないことや、本土の男性による朝鮮の要素を含む神楽と、離島の女性による神懸りを伴う神まつりといった著しい分布の相違は、もともとこの地域に男の神楽が存在しておらず、文化が高度化した後で、朝鮮から南九州の本土、とくに霧島周辺に、跳躍性にとむ舞が渡来して、今日見られる男性の神楽の様式が確立される基盤となったと見てよいのではなからうか。

その場合、男性の神楽において神懸りを伴わないことによって確保されているものだが、離島の女性による無意識状態となる神まつりには見られない、舞手が鈴で刻む明確なリズム、陣型を変えることに代表される整然たる振付といった諸要素が、新しい表現法として移植されたのではないかと考えるわけである。